

1

刀折れ
矢尽き果てし
朱夏の午後
南風至り
我を叱咤す

2

往く春や
潮騒優し
渚なまむ
小貝の肩に
桜一片

3

この惑星の
すべての人の
秘めるてふ
尊厳の意味
深く知りたし

4

露草と
碧を競へる
朝顔の
秋の野面に
彩を添う

5

病癒へ
秋の黄葉の
ただ中を
歩めば心
脆くなりゆく

6

初秋の
高空の下
後髪
惹かれ断ち切り
独り旅往く

7

近づきて
また遠ざかる
電音に
また溜め息す
祖母の丸き背

8

胸ふたぐ
想い幾度か
させし後
燕の子は
空高く翔ぶ

9

遙遙と
来つるものかな
旅の空
父の背中し
想い出でたり

10

往く秋の
伊豆の浜辺の
潮騒に
君が面影
静かになぞる

11

人生は
オセロゲームと
心得よ
最後に暗き
花をば咲かせ

12

久方の
光は千鳥の
白妙の
胸毛に宿り
秋は来にけり

13

払暁の
茄子紺の空
プラチナの
昂視きて
冬はきざしぬ

14

燕去り
雁の来りて
秋の空
瑠璃の深みや
極まりゆきぬ

15

彩の
日々鮮やかに
磨かれて
秋深まれり
紫式部

16.

往く秋の
土佐の山河は
懐かしや
山いや青く
海いや碧し

21

足摺の
彼方にありし
空と海
我が憧憬は
駆け往きにけり

26

故郷の
青き流れに
蝦蟹を
追いゆきし日々
遙かになりぬ

17.

秋冷の
庭に降り立ち
拾い上げ
朱鮮かな
柿落葉かな

22

種々の
花に見えし
我が命
音色様々
奏で出でけり

27

秋霖は
朱夏の名残の
熱を
彼岸花へと
凝結したり

18.

人の世に
雨と注ぎて
雲と湧く
悲しみ悩み
やがて青空

23

高嶺なる
巖根の狭間
健気にも
天を指しおり
薄雪草は

28

告げたしと
切に希めど
人はなく
甲斐なき想い
風に乗せやる

19.

あの年も
暑かったねと
久しぶり
頷き合へる
朋がいる夏

24

早稲穂
早く伸び行き
鴨の雛
匿わまほし
鴉の眼より

29

山笑ひ
海微笑みて
南国の
山河に春は
滴ち溢れたり

20.

秋霖の
朱夏の微熱を
拭いゆき
葛の花弁
散り敷きにけり

25

故郷の
碧き海より
昇りくる
稀月日貝
命なりけり

30

春立ちて
角ぐむ葦の
その先に
かすかに兆す
浅緑かな

31 種々の
虫も食も
ほのぼのの
種れ吐へる
この良夜かな

36 春の口元
ふと故郷が
惚ぼれて
母の肩など
叩きたくなる

41 夜長ほど
書物繕も
そのかみの
先達の声
静かに聴かむ

32 舞て来る
鳥の季節の
幕開けを
矜らかに告ぐ
百舌の高鳴き

37 春の空
潤み霞つ
朦朧の
淡青色に
優しさを滲む

42 舞の
集く処の
移りゆき
その音が細く
秋深まれり

33 過ぎ去れば
束の間なりし
わが命
揺籠にあり
古希の感慨

38 秋深し
屋根に落ちたる
栗の実の
転びゆく音
背戸に聞しゆる

43 秋景を
点晴しおる
柿の朱
想いは還る
母の重箱

34 秋線の
春の渚に
蛙
響き小庭
濡れそぼちおり

39 秋雨を
聴きつつ臥せむ
澄みし音
心の響を
洗い拭えり

44 秋の暮
人恋しむに
胸ふたぎ
ひとり潤みぬ
里の灯

35 秋風
春の嵐の
三日後じ
肌理ごと細き
砂洲に到れり

40 望月を
観おれば心
何時の間か
田くなりゆき
鎮まりゆきぬ

45 秋空を
空の鏡に
照り映えし
ふりばじまの鏡ね
瑠璃の深きよ